

- 3) Joseph Gold, "The Normality of Snopesism" in *William Faulkner: Four Decades of Criticism*, Linda Welshimer Wagner (ed.) (East Lansing: Michigan State Univ. Press, 1973), p.323.
- 4) Florence Leaver, "The Structure of *The Hamlet*," *Twentieth Century Literature*, I (July, 1955), 83.
- 5) Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blother (eds.), *Faulkner in the University: Class Conferences at Virginia 1957-1958* (Charlottesville: Univ. of Virginia Press, 1959), p.197.
- 6) Edmond L. Volpe, *A Reader's Guide to William Faulkner* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1964), p.307.
- 7) Ward L. Minter, *The World of William Faulkner* (New York: Cooper Square Publishers, 1963), p.100.
- 8) David Minter, *William Faulkner: His Life and Work* (Baltimore and London: The Johns Hopkins Univ. Press, 1980), p.180.
- 9) 大橋健三郎, 『フォークナー研究 2』(東京:南雲堂, 1979), p.333.
- 10) Olga W. Vickery, *The Novels of William Faulkner: A Critical Interpretation* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1964), p.175.
- 11) Volpe, p.308.
- 12) William Faulkner, *Light in August* (New York: Random House, 1932), p.42.
- 13) Volpe, p.310.
- 14) Vickery, p.177.
- 15) Gold, p.323.
- 16) Cleanth Brooks, *William Faulkner: First Encounters* (New Haven and London: Yale Univ. Press, 1983), p.98.
- 17) Volpe, p.311.
- 18) Cleanth Brooks, "Faulkner's Vision of Good and Evil" in *Religious Perspectives in Faulkner's Fiction: Yoknapatawpha and Beyond*, J. Robert Barth, S. J. (ed.) (Notre Dame: Univ. of Notre Dame Press, 1972), p.74.

relaxation all year long” (p.308) と語る。彼らにとって、馬を追いかけるのは、必ずしも物欲のためばかりではなく、果てしなく続く単調な生活、激しい労働からの束の間の脱出でもあるのだ。同じように、終章で、埋められた金貨堀りに我を忘れる Ratliff, Bookwright, Armstead の場合、特に、他の二人とは違い、家族を抱える Armstead にとっては、金貨は、貧しい生活からの脱出という切実な夢をも意味しているように思われる。ところが、村人達や Armstead の思いは、実は、Flem によって利用されているだけなのである。牝牛と共に太陽の歩みに歩調を合わせる Ike とは対照的に、この作品の最後の頁で描かれる Armstead は、もはや太陽を見上げることもなく、“a mechanical toy” (p.365) のように機械的に穴を掘り続けている。全四章の最後の場面は、第一章では Flem の成功であるのに対して、残りの三章では、全て、或る意味では、思いをこわされたり、封じ込められたりした人間の姿が描かれている。

Flem, Eula, Ike を、*The Hamlet* 以前の作品の登場人物達と比べてみてわかったように、この作品では、以前の作品には見られた一種の価値基準が、逆になっているか、或いは失われている。その価値基準の大きな源のひとつは、共同体、ここでは Frenchman's Bend なのだが、そもそも作品冒頭の紹介に見られるように、すでにこの土地自体が、一帯を所有していた誰かの夢がこわれ、切り刻まれた結果、生じた村なのである。元所有者の“dream”や“pride”はもはや“dust”にまみれてしまっているし、又、彼の広大であった土地は今では“small shiftless mortgaged farms”へと分割されている (p.1)。ここでは Eula や Ike に見られる神話的な豊かさ、自然との一体感は、社会から切り離された形でしか存在し得ない。一方、現実の社会の中で、人々の心はもがき苦しみながらも、ともすれば利益の方に引きずられていき、Armstead のように、自分で掘った穴の中に落ちこんでしまう。そのような場で、成功していけるのが Flem であるならば、彼は、もはや人間というよりも、そのような社会の具現化と考えられる。それ故に、人間としての Flem の姿は、作品の最後まで語られずに、外側から描かれるだけなのである。このように見ていけば、多くの場面にユーモラスな調子があっても、*The Hamlet* は、本当に暗い小説であると言わざるを得ないのである。

注

- 1) William Faulkner, *The Hamlet* (New York: Random House, 1940), p.7. 以下、同書からの引用はこの版による。
- 2) Michael Grimwood, *Heart in Conflict* (Athens: Univ. of Georgia Press, 1987), p.145.

The Sound and the Fury 中の有名な白痴 Benjy Compson を連想させる。けれども、Benjy は人間である姉 Caddy を愛するし、自分の内部の価値判断力に照らして、外界におかしい点があれば、すぐさま反応する。何よりも、没落しつつある Compson 家という現実の中で、Benjy はともかくも生きている。それに対して、Ike と牝牛との幸福な結びつきの場は、社会から離れた場でしかあり得ない。牝牛が殺されたあと、善良な Eck Snopes が Ike への同情のために買ってやった牛の人形で大人しく遊ぶ Ike の姿からは、牝牛がもはや居ないということを、彼が果たして悟っているのかどうかさえわからない。このような Ike の姿で、第三章は幕を閉じるが、元々、Ratliff が始めて Ike を見かけた時、彼の眼は “the pale eyes which seemed to have no vision in them at all” (p. 81) であった。結婚後の Eula の眼つきが “blank” であったことと考え合わせれば、この、何も見ていないような彼らの眼は興味深い。何故なら、彼らの眼は、Eula も Ike も内部には豊かな可能性を秘めた存在であるのに、外部に眼を閉ざすことによって、言い換えれば、外界との間に一種の不透明な膜を持つことによってのみ、現実社会での存在を、辛うじて許されている存在であることを、示唆していると思われるからである。

以上のように、Faulkner の悪人の特徴のひとつは、自然から切り離されていることならば¹⁸⁾、Eula や Ike と対照的である Flem は、まさしく悪人の一人だと言える。ところが、第 I 章で見たように、Frenchman's Bend という共同体においては、そのような Flem はむしろ成功していくのに対して、自然の具現化である Eula や自然と共に生きる Ike は、その本性に従って生きていくことはできないのである。

IV

The Hamlet の舞台である Frenchman's Bend とは、計算され得ぬもの、豊かなもの、同情心、夢などが、そのままの形では存在することのできない場として描かれているように思われる。第 II、III 章で見てきたように、ここでは、“profit” を行動の中心に据えた Flem が成功していくのに、Enla や Ike はその内部の可能性のためにむしろ生き難いのである。

更に、例えば、Ike に同情を寄せる Eck Snopes は、牛の代金の分担金を取り決める際に、より Flem に近い思考法をする I. O. Snopes の言い立てる理屈によって、分担金の大部分を払わされる。又、第四章での馬のせり市のエピソードでは、野生馬を買った村人達が、逃げ出した馬達を捕えるために駆け回っているのを知った Varner は、村人達のことを “a man that aint got no other

unity with nature”¹⁷⁾を象徴している、とやはり Ike の場合も自然が問題とされているが、Eula に比べると、彼の世界はより個人的かつ私的である。

Ike の描写では、匂いや彼の手の動きについての記述が、他の箇所にくらべてより多く見られる。匂いは、牛の匂い、餌の匂い、ミルクの匂いなどで、手は、牝牛に向かって差しのべられたり、乳しぼりをしたり、牝牛のために花を摘んだりする。このことは、彼の感覚が鋭く、体を使って生きていることを示している。人間よりは動物に近い Ike であるからこそ、牝牛に恋をするのであるし、彼らの一体感及び彼らと自然との一体感は、次のような文章によって表わされている。

Now he slacks the rope; from now until evening they will advance only as the day itself advances, no faster. They have the same destination: sunset. (p.183)

すなわち、Eula が自然の具現化ならば、Ike は自然の中で自然と共に生きる人間の姿を表わしているのである。従って、人間社会では必要不可欠な金銭も、彼にとっては何の意味も持たない。牛と一緒に居る所を見つけられた Houston から50セント与えられても、Ike は50セント玉を握った手を橋の上で何となく開いて、それが落ちていくのを眺めている。このような Ike が、同じ Snopes の一員である Flem とは対極に位置する存在として描かれていることは、明らかである。

しかしながら、牝牛と自分だけの世界では限らない幸福感を味わっていた Ike が、いったん公の場に出ると、人々の好奇心の対象物でしかなくなる。すなわち牝牛の所有者 Houston が彼に牛を与え、それが Mrs. Littlejohn の宿屋の囲いの中に入れられると、Flem の後釜として店員になった Lump Snopes の手で、囲いの羽目板が大人の眼のあたりではがされ、囲いの中での Ike と牝牛との交渉は、村人達への見世物とされるのである。人間と牛との恋愛は起こってはならないことなので、Ratliff が介入して、この見世物は終わりを告げることになる。ギリシア神話の世界では起こり得た人間と牛との恋愛も、現実の社会に引きずり出されると、単にグロテスクでしかないのである。更に、Ike を見世物にする Lump は、Flem の後釜であり、“exactly like the old one” (p.160) すなわち Flem と非常によく似ていると書かれているから、Flem 的な力は、ここでも自然と結びついた人間を何らかの形で侵略しようとしているのである。

そしてまた、Eula の持つ一種の限界を、Ike も持っているようである。彼は、

美しい Eula の他に、結婚と引き換えに Varner から現金と、終章でわかるように、彼の Jefferson 進出への足がかりとなる古屋敷 Old Frenchman's place とを手に入れるのである。

第一章で、共同体の価値観と Flem とが対立しているのに、むしろ Flem の方が共同体を征服していったように、この章でも、Eula の表わす価値観は、Flem 的価値観に征服され、利益を引き出されるのである。この結婚のいきさつに関しては何も説明がないので、Varner が世間体を気にして結婚させたのか、あるいは Eula の苦境に乗じて、Flem の方から働きかけたのか、真相は不明である。

しかし、Faulkner の他の作品に登場する未婚のままに妊娠する女達と比べるなら、Eula の結婚とその変化は、やはり納得しにくい。*Light in August* で、臨月の身でありながら、逃げ出した恋人 Lucas Burch を尋ね歩く Lena Grove の場合は、両親を早くに亡くして兄夫婦の世話になっている孤児であった。従って、両親からの制約がない分だけ自由に行動しやすいだろうと思われる。が、*The Sound and the Fury* (1929) の Caddy Compson の場合は、両親は健在でしかも Compson 家は町の旧家でありながら、結婚前の恋人との間に生まれた娘を実家に置いてとび出し、今なお Compson 家の人々の記憶の中では生彩を放っているのである。

とすれば、Eula が Flem と結婚するのは、単に世間体のためだけではなさそうである。自らは行動を起こそうとはしない Eula の怠惰さも大きな要因であろうが、彼女を、現実世界で生きていく生身の人間というよりも、Brooks の言うように、自然の具現化と考えれば、この章の結末はより納得しやすい。すなわち、人間が自然を切り開き、そこから利益を手に入れてきたのが、近、現代の歴史であるならば、自然の具現化である Eula が Flem によって利益を引き出されるのは、当然の結末である。現実の自然が、たとえ侵略される時でも受身であるように、Eula も又、侵略される時には受身でしかいられないのである。

このように、Eula と Flem との結婚は、Eula を自然の具現化と考えることによって、Flem とは、自然から利益を引き出してきた近、現代の人間の典型でもあることがわかる。そして、ここで Frenchman's Bend は、Eula によって表わされているような豊かな自然が、もはや利用されることでしか生きのびることのできないような場として描かれている。

次に、Eula と同じように、Flem との対照性ということで注目したい登場人物は第三章の Ike Snopes である。彼と彼の恋する牝牛との川のほとりでの逢引の場面は、共同体の人々から目撃されることはない。Ike は、"human being's

long sum of human thinking and suffering which is called knowledge, education, wisdom" (p.115) を捨て去っていた、と書かれている。Labove の、薪割りと同じ熱心さで、本の頁数を数えながら勉強する姿と、このような Eula の充足した姿とは、全く対照的である。

以上のような Eula の特徴は、ひと言で言えば、Eula が現に Frenchman's Bend の住人でありながら、同時に "a teeming vacuum" (p.95) の中に生きているということである。そのような二面性を持ち合わせながら成長して、彼女は Hoake McCarron に出会うのである。二人の交際を見守る者のうち、Eula の求愛者である五人の男が、彼女が十六歳のある夜、二人の乗る馬車に襲いかかる。この時も、McCarron が二人を相手に格闘するのに対して、Eula は鞭の柄で残りの三人を追いつく程、十分に健康的でたくましいのである。

ところが、その後、彼女の妊娠の事実が両親や兄 Jody に知られ、McCarron が逃げ去ってしまうと、彼女と Flem の結婚が、外側から手短かに語られるだけで、それからの彼女の内面はわからなくなる。新婚旅行に出掛ける Flem 夫妻を見送る Ratliff の眼には、何も見ていない Eula の "the calm beautiful mask" (p.147) が映るばかりである。作品を読み進んでいっても、Texas から帰ってきた彼女は、"Flem Snopes' wife" (p.306) と呼ばれ、その眼つきは "blank" (p.306) なままである。このように妊娠後の Eula は、もはや先程見たような少女時代の性質を失い、未婚のままに妊娠という事実を隠すために、世間体のために親の言いなりになる人形じみた女性に見える。

このような落差は何故生じるのだろうか。又、Eula が Flem と結婚するというこの章の結末は、何を意味しているのだろうか。それを考えるために、二人の対照性に注目したい。

Ⅱ章で見た通り、Flem については行動の素早さが強調されていた。それに対して "Eula" の章では冒頭で彼女の怠惰ぶりがいささか誇張して語られる。「動」に対する「静」という二人の対照は明らかである。又、Flem には愛情や感情に関する逸話は全くないが、Eula の物語はまさしく彼女が男達の心に引き起こす愛情や感情に関する逸話で成り立っている。しかし、最も大きな対照は、Flem の世界が機械的な正確さで動いているとすれば、それに対して Eula の世界では、事物が機械的な正確さからはみ出してしまふ、ということである。"knowledge, education, wisdom" とは、言い換えれば、どう動けばどういう結果がでるかという人間社会の仕組みを体系づけたものである。Eula には、そのようなものは必要がなく、又、彼女は、一人の男では集めきれぬ程の収穫を生み出す "land" にたとえられていた。それにもかかわらず、妊娠をきっかけに、Eula が手に入れるのは愛情の持てない男 Flem であり、一方、Flem は、

III

ここでは、Eula と Ike について考えてみたい。Flem と Eula との対照性¹³⁾、Flem と Ike との対照性¹⁴⁾、に注目すれば、Flem の特徴がより明らかになりそうであるからである。

まず、Eula に関しては、“Eula symbolized nature”¹⁵⁾ とか “She is a kind of incarnation of nature”¹⁶⁾ と、彼女と自然との結びつきが、批評家達によって指摘されているが、具体的には、彼女はどのような人物として描かれているのだろうか。

少女時代の Eula の特徴としては、主に次の四点があげられる。①彼女にまつわるコミカルな調子②彼女とギリシア神話との関連③彼女の豊かさ④彼女が教育や知識を必要とはしないこと、などである。

①に関しては、第二章の冒頭で彼女の怠惰さが誇張してユーモラスに語られているために、読者は、ここではほら話の世界に引きこまれていくような印象を受ける。たとえば、彼女は動くのが嫌いで、子供の頃はテーブルとベッドへ行き来する以外は自分から動こうとはしなかった、と最初の頁で紹介されている。②に関しては、やはり第二章の最初の頁で、彼女の様子には “the old Dionysic times” (p.95) を思わせるものがあつた、と語られている。後に、小学校に行くようになってからの Eula が机の間を歩くだけで、木机や椅子を “a grove of Venus” (p.114) に変えてしまうとか、他にも彼女をギリシア神話と関連させて触れている箇所があるから、ここでの作者の試みは明らかであろう。先程述べたほら話のような調子やギリシア神話への言及で、Faulkner は、Eula を現実や現在とは違った世界の中に位置づけようとしているのである。③については、少女時代の Eula に恋をして、彼女を手に入れようと思いつめる小学校教師 Labove の眼を通して、主に語られる。彼は、Eula を人間の計算の及ばぬ豊かさを持つ “land” にたとえ、次のように想像する。

He saw it: the fine land rich and fecund and foul and eternal and impervious to him who claimed title to it, oblivious, drawing to itself tenfold the quantity of living seed its owner's whole life could have secreted and compounded, producing a thousandfold the harvest he could ever hope to gather and save. (p.119)

Labove によれば、Eula は持ち主に関わりなく存在し続ける “land” で、豊かな実りをもたらしてくれるのである。又、④については、彼女は “the whole

られていく様子は見受けられない。又、Snopes 一家から利益を引き出そうと考えた Jody が、逆に、放火されることへの恐れから、Flem を店員として雇い、“I had to hire him!” (p.27) と叫ぶことになるのも、Flem の思わくを探りようがない、つまり彼とのコミュニケーションを作りようがないためである。

このように、Flem の大きな特徴としては、まず、Frenchman's Bend にとっては新参者である彼が、共同体の習わしとは相容れないということが指摘できる。取引にも楽しみを見出そうとしたり、Snopes 一家をたねに噂話をくり広げる村人達の生活には一種の余裕なりルーズさがうかがえる。しかし、Flem の方は、正確にかつ効率的に、利益という一点を目ざして行動するのである。反 Snopes 的な感情とは、多くの点で新移民に対する感情を反映している¹¹⁾と Volpe は指摘しているが、これは、ある意味ではその通りである。ただし、単に価値観が対立するというだけではなく、Flem のもうひとつの特徴は、彼の実像が村人達にとって曖昧であること、言い換えれば両者の間に、コミュニケーションがないことである。

共同体の習わしと相容れないこと、あるいは周囲の人達とのコミュニケーションの欠如という問題は、Faulkner の他の作品の中で、しばしば取り上げられている。*Light in August* (1932) の元牧師 Gail Hightower は、幼い頃に黒人の召使い女に繰り返し聞かされた、南北戦争中に戦死した祖父の輝かしい姿に心を奪われる余りに、現実には周囲にいる人達に眼を向けられなくなっている。又、父親が北部人である Joanna Burden は、南部町 Jefferson で “a lover of negroes”¹²⁾ と見なされている。そして、物語が展開するにつれて、Hightower は精神的に滅び、Joanna は殺害されるのである。

しかし、Flem の場合は、Hightower や Joannaに通じる面を持ちながら、自分が暮らす共同体の中でむしろ成功していく。その実体の曖昧さを一種の武器として、Frenchman's Bend の住人達に、自分の存在を認めさせていくのである。更に、成功者としての Flem を見た場合、彼と同じように成功と、更には破滅の物語の主人公である *Absalom, Absalom* (1936) の Thomas Sutpen には、プランテーションの所有者になるという一大目的があった。*Sanctuary* (1931) の Popeye も一種の悪人であるが、最終章でその生い立ちが語られると、彼の人間的側面がうかがえる。それに対して、Flem の上昇は利益その物が目的であるように思われるし、彼の生い立ちや家族関係については、作品中で何も述べられていないのである。従って、読者にとっても、Flem は最後まで曖昧な人物であると言える。

これは、現在の Frenchman's Bend における Flem の態度に、確かに相通じるが、Ab と Pat Stamper との取引の逸話では、Ab の態度は次のように語られる。

And Ab wasn't trying to beat Pat bad. He just wanted to recover that eight dollars' worth of the honor and pride of Yoknapatawpha County horsetrading, doing it not for profit but for honor. (p.36)

つまり、Pat Stamper との馬をめぐる取引では、Ab は “profit” ではなく、“honor” のために、Stamper に戦いを挑んで、結局は手ひどく負けるのである。“profit” 以外のものに関心を向ければ、純粋に “profit” のみを追求する力は弱められてしまうし、取引に負けた結果 “soured” になる、という感情的な反応も示すことになる。ところが、Flem の場合、彼の服装に表わされているような正確さは、“profit” 追求以外の曖昧な感情は、認めていないように思われる。「何よりもアブは、古い秩序の終わりに位置してその秩序に恨みを投げつける存在であるのに対して、フレムはむしろまさしく新しい時代そのものの無道德性、非人間性を象徴する人間にはかならないのだ。」⁹⁾と指摘されている通り、Ab と Flem には大きな違いがあるのである。

そのような Flem と Ab との違いは、Flem と Ratliff との違いにも反映されている。Ab が、Pat Stamper との取引では “honor” のために戦ったように、Pat Stamper が馬の取引をしていたのは、利益のためばかりではなく、“the pleasure of beating a worthy opponent” (p.30) のためでもあると、Ratliff は語る。そこの土地柄としては、Jody の勘定間違いと同じように、取引は利益を得るためばかりではなく、一種の楽しみのためでもあるのだ。村では取引自体は別に悪いことではないし、よく行われている。Snopes 一家が村に登場してから、その動勢を見守り、作品全体を通じて対 Snopes 的な言動をする Ratliff が Ab の身の上を語る時の顔は “shrewd face” (p.42) であるし、彼は第一章でも、山羊の売買の取引で Flem を負かそうと策略を試みて、失敗する。又、Varner 家が放火をしたという噂のある Ab に土地を貸したのは、Ab 達の取り入れが終わってからマッチを見せれば、彼らは正体を見破られたと知って急いで逃げ出すだろう、そうすればこちらの利益になる、という Jody の計算によるものだった。

ところが、Ratliff の取引が一種の “a way of extending and cementing personal relationships” ¹⁰⁾ でもあるのに対して、Flem の動きは村の実力者である Varner 家のみに向かう直線的なもので、その過程で彼の人間関係が広げ

がそれまで暮らしてきたやり方と、新参者である Flem のやり方とは、真向から対立するのである。それなのに、Flemの方が、Varnerを始めとする村人達を次第に圧倒していくのは、彼にどういう力があるからだろうか。

ひとつには、Flemの方が一見正当、正確だからである。計算間違いをしないことも、たとえ店主である Varner にさえ、店に置いてある煙草の代金を請求することも、別に悪いことではない。むしろ、彼が有能な店員であることを示している。煙草の代金を請求された時に、Varner が言われるままに金を払うのも、Flem のやり方の正当さを認めているからである。

しかし、Flem の正確さは、例えば彼の服装によって大変誇張して表わされているから、必ずしも、肯定的に描かれているわけではないことがわかる。店員として初めて現われた時、彼は“a brand-new white shirt” (p.51) を着ているのだが、そのシャツが次第に汚れていき、第二週目に着てきた全く同じような白シャツも、第一週目と同じ箇所が汚れていく。その後、村の教会に初めて現われた時には“a clean white shirt”と“a tiny machine-made black bow” (p.57) を身につけており、続いて“from that Sunday morning until the day he died he wore it or one just like it” (p.57) と書かれている。服装には個人の性格やその折々の精神状態が反映されるはずなのに、Flem の場合には、人前に姿を現わす時は、いつも同じ服装を、しかも死ぬまで身につけているわけだから、彼の服装は、彼の内部は感情の変化がないのか、あるいは外部には表わされない、ということを示している。「シャツの同じ箇所が汚れていく」に至っては、彼が、絶えず流動的に変化せざるを得ない人間とは違った何かであることを示唆している。

このような Flem の正確さが独特であることは、彼と、同じ Snopes である父親 Ab とを比べてみれば、よりわかりやすい。Varner の元へ小作地を借りに来た Ab の身の上は、主に Ratliff によって紹介されている。ミシン行商人であるために、近隣の情報に通じている Ratliff によれば、Ab は以前地主の De Spain 少佐といざこざを起こしたあげく、彼の納屋に放火して逃げ出したらしいこと、又、現在の Ab が“just soured” (p.29) である理由として、南北戦争中に踵を射たれたことや、馬の取引で Pat Stamper という男にだまされたことなどがわかる。Faulkner の作品中の登場人物、特に旧家の出身者達にとっては、南北戦争は大きな意味を持つのだが、南北戦争中の Ab の態度は、Ratliff によれば、“just tending to his own business, which was profit and horses” (p.29) と語られている。南部社会では一大事件であった南北戦争のさ中でさえ、彼は自分独自の行動基準すなわち“profit and horses”だけを気にかけていたのである。

これは、Flem の行動が素早いばかりでなく、彼の行動が表面化するまでの過程が、人々の知らない場で行われるせいもある。Varner の店の外の回廊にたむろする村人達にとって、Flem と Varner の交渉のわかりにくさは、しばしば、店の扉の向こう側から聞こえてくる二人の声のやりとりによって示されている。彼が、暗がりには潜む “a spider of that bulbous omnivorous though non-poisonous species” (p.58) の性質を持っている、とクモにたとえられているのも、彼の行動が人目につかない所で行われているからである。つまり、村人達や Ratliff という外側の視点からのみ語られることによって、Flem の素早さや、正体不明の印象が強められるのである。

又、彼の外貌からわかる事も幾つかある。顔については “His face was as blank as a pan of uncooked dough.” (p.22), 眼については “eyes the color of stagnant water” (p.51) と書いてある。つまり、顔には表情がなく、眼から表情を読み取ろうとしても、その眼の奥にある感情は探りようがないのである。更に、彼については、次のように書いてある。

who answered Yes and No to direct questions and who apparently never looked directly or long enough at any face to remember the name which went with it, yet who never made mistakes in any matter pertaining to money. Jody Varner had made them constantly. (p.56)

口数が少ない、相手をよく見ない、というのは、Flem と周囲の人々とのコミュニケーションがよく成り立っていないことを示している。人々から注目される対象であるということは、人々と対象物との間に距離がある、互いに相容れない、ということである。“a complete stranger” が内部に入りこむには、コミュニケーションは勿論大切であるし、共同体のやり方に、新来者の方から合わせていくことが必要であろう。

ところが、Flem の場合には、上記の引用の最後の部分にもある通り、「Jody Varner は金に関わる計算間違いを絶えずしていたのに、Flem は決して間違いをしない」のである。村人達が Jody のやり方を認めてきたのは、必ずしも、彼が村の実力者の息子であるからではない。Jody が店の品物の勘定を自分の得になるように多少間違えると、客はそれを指摘して訂正させたり、別の機会にその損を取り戻そうと、互いに駆け引きをすることになる。その駆け引きも彼らのコミュニケーションの一種なのだが、Flem は「間違いをすることがなく」、間違いを見つけられることもないので、村人の一人 Bookwright は、Flem のそのようなやり方について、“And folks dont like it.” (p.57) と言う。村人達

のだろうか。

それらを考えるために、第Ⅱ章で Flem を、第Ⅲ章では、Flem とは対照的な人物として、後に Flem と結婚する Eula Varner と、Flem の従弟で白痴 Ike Snopes を見ていきたい。

Ⅱ

全四章で、Flem が最も多く登場するのは第一章においてである。小作地を借りながら転々と渡り歩いて暮らす Ab Snopes 一家の息子 Flem が Varner 家の店の店員におさまるまでが、ここで語られている。以下、第二章では Varner 家の娘 Eula の少女時代が中心で、彼は Eula の結婚相手として最後に簡単に紹介されるだけである。第三章は彼が新婚旅行で Texas に出掛けている間の、Ike と牝牛の恋愛事件、Mink Snopes の Houston 殺害事件を扱っている。Snopes 一族にも様々な性格の者がいることを示すかのように、Ike や Mink 以外の Snopes 達が登場するが、Flem は全く登場しない。第四章では、Texas から連れてこられた野生馬のせり市と、Ratliff 達の、古屋敷 Old Frenchman's place での金貨探しが語られる。ここで彼は、二つの出来事の裏で糸を引いているが、表面には現われないままである。従って、これから、第一章を中心に、Flem の性格づけを見ていくことにする。

まず、章全体を通じて目につくのは、“Flem is always in motion.”⁸⁾と言われるような、彼の行動の素早さである。“Aint no benefit in farming. I figure on getting out of it soon as I can.” (p.23) と Varner に告げてからの彼の行動を順に並べれば Varner の店に店員として登場、Varner が店で手にした煙草の代金を請求、店から一マイルの家に下宿、Varner の息子 Jody の代わりに綿繰り機の運転開始を監督、他の Snopes 一族達の村への出現、鍛冶場の建設、となる。最後には、Varner の愛用する樽から作った椅子に Flem が坐っているのを見かけた、という村人の証言で、第一章は幕を閉じる。つまり、Flem は村の頂点に立つ Varner を目ざして、地理的には勿論、身分的にも近づいてくるのである。

それに対して村人達、あるいは Ratliff は、いつも Flem の行動の結果だけを目撃することになる。行商の道すがら、時折 Frenchman's Bend を訪れる Ratliff はともかく、村人達は絶えず Flem の行動に注目しているはずなのに、彼らが気づいた時には、Flem はすでに次の場へとおさまっているのである。Flem との交渉の当事者である Varner や、Jody 自身にとっても、いつの間にか立場が逆転している。

The Hamlet の Flem Snopes と Frenchman's Bend について

酒 井 三 千 穂

I

Snopes 三部作の第一部 *The Hamlet* (1940) では、Frenchman's Bend という村が舞台である。村の実力者かつ最大の地主である Will Varner から、当初 “a complete stranger”¹⁾ と見なされる Ab Snopes を始めとする Snopes 一族の村への登場と、Ab の息子 Flem Snopes が村で次第に成り上がり、次の活躍の場 Jefferson の町へ向かうまでが語られる。作品は四章に分かれ、第一章 “Flem”，第二章 “Eula”，第三章 “The Long Summer”，第四章 “The Peasants” の各章で、中心となる人物、事件が移り変わっていく。

ひとつには、そのような構成のために、“disunity of the book”²⁾ や “apparent chaos of *The Hamlet's* structure”³⁾ が指摘されるが、作品全体を通じて、Flem の成功物語というあらすじは、時間的な順を追って語られている。“a linear movement toward a climax”⁴⁾ と呼ばれる一本の筋が通っており、しかもそれが、民話や文学作品を問わず、人々の関心をとらえつづけてきた成功の物語であるために、*The Hamlet* には、その構成にもかかわらず、一種の統一性が感じられるのである。

更に、四章を通じての Flem の言動は、村人達から、又、Jefferson に住み、度々 Frenchman's Bend を訪れるミシン行商人 Ratliff から、常に注目されている。そのために、彼が場面に直接に登場しない時でさえ、読者の注意は Flem に向けられることになる。

Snopes 一族については、作者 Faulkner 自身は、後に “Of the Snopes, I'm terrified.”⁵⁾ と述べ、批評家達は、“a general social and moral pollution”⁶⁾ とか “symbolic or representative of certain personalities and events in our present-day society”⁷⁾ と、言っている。彼らは Yoknapatawpha Saga に登場する有名な一族のひとつであるが、その代表的な人物である Flem はどのような特徴を持っているのだろうか。又、Frenchman's Bend とはどのような場な